

『蠅のはなし STORY OF A FLY』

小泉八雲作・大谷正信訳

登場人物

九兵衛

玉

妻

ナレーター

◆二百年ほど前。京都の九兵衛には、玉という下女がいた。
◆ナレーター、玉

二百年ばかり前に、京都に飾屋九兵衛という商人が居た。店は島原道の少し南の、寺町通という町にあった。下女に——若狭の国生れの——玉というが居た。

玉は 九兵衛夫婦に親切に待遇されていて、誠に二人を好いて
いるように見えていた。が、玉は 他の女の子のように綺麗な着物を
着ようとはしないで、休暇を貰うと、美しい着物を数敷貰って
いながら、いつも仕事着を着て出るのであった。五年ばかり九兵衛に
奉公してからのこと、ある日 九兵衛は、どうして身綺麗にしようと
骨を折らぬのかと彼女に訊ねた。

玉は その問いに こもっている非難に顔を赧らめて、 恭しく
こう答えた。

玉 『私の双親が死にました時は、私は まだ小さな子供で
ありました。ところが他に子供が ありませんでしたから、
二人のために法要を営むことが、私の義務になりました。
その時分には そうする程のお金を 拵えることが
出来ませんでした。しかしそれに入用な金が儲けられたなら、
早速二人の位牌を、常楽寺というお寺へ置いてもらい、
また法要を営んで貰おうと決心しました。それで その決心を
果たすために、お金と着物とを 節約しようと力めました。——
自分の身のことを構わぬと、お気付きになる程でありますから、
余り節儉し過ぎているのかもしれない。しかし、

お話し申し上げました目的のために、銀百匁ばかりの貯蓄が
もう出来ましたから、この後はあなた様のお前へ身綺麗にして
出るように致しましょう。これまでの懈怠と失礼とを、どうか
御免し下さいますよう お願い致します』

九兵衛はこの率直な自白に感心したので、その女に親切な
言葉をかけて、その後、どんな着物を着ようと、自分の勝手だと
思っおもてよいからと受合うけあい、且かつまた、その親孝行を賞ほめてやった。

二場

◆玉が病死した後、九兵衛の家に同じ蠅がくるようになる。
◆ナレーター、九兵衛、妻

二人のこの会話が あってから間も無く、下女の玉は、その双親の位牌を常楽寺に置いてもらい、また相当な法要を営んで貰うことが出来た。貯えた金のうち、斯くして七十匁費やした。そして残り三十匁を、主人の妻に預っておいて下さいと頼んだ。

ところが、翌冬の初めに玉は 急に病気になった。そして暫時、煩った挙句、元禄十五年（一七〇二年）正月の十一日に死んだ九兵衛と妻とは その死を大いに悲しんだ。

さて、それから十日ばかり後、非常に大きな蠅が一匹 その家へ入って来て、九兵衛の頭の廻りを飛び始めた。どんな蠅も、大寒中には大抵は 出て来るものではないし、大きい蠅は 暖かい季節でなければ滅多に目に当らぬものだから、九兵衛はこれに驚いた。その蠅が あまりしつこく九兵衛を悩ますので、わざわざ捉えてそれを戸外へ放り出した、——その間少しもその蠅を痛めぬようにしてそれは九兵衛は 仏教の篤信者であったからである。直ぐ蠅は戻って来た。そしてまた捉えられて また投げ出された。が、また入って来た。九兵衛の妻はこれを奇異な事に思った。

妻 『玉じゃないかしら』

と言った。「死んだ者——殊に餓鬼の境涯へ入る者——は時時、虫の姿になって戻って来るから」九兵衛は笑って答えた。

九兵衛 『目印をつけたら分るだろう』

そこで、その蠅を捉えて、極く少しばかり翅の両端を鋏で切って——
そうして、家から余程離れた処へ持って行って放した。

翌日帰って来た。それが帰って来たことに、何等靈的な意義があるかどうか、九兵衛はなお疑っていた。またもそれを捉えて、その翅と軀とに紅を塗り、前よりもずっと家から遠い処へ持って行って放した。ところが二日経つと、全身真紅の儘で戻って来た。そこで九兵衛は疑わなくなった。

九兵衛 『玉だと思う』

と彼は言った

九兵衛 『何か欲しいものがあるのだ。——何が欲しいのだろう』

その妻が答えて言うに、

妻 『私は玉の貯蓄の三十匁をまだ有っています。自分の魂のために供養を営むように、その金をお寺へ納めてもらいたいのでしよう。玉はいつも後生を氣づかっていますから』

そう話しているうちに、その蠅が、そのとまっていた障子から下へ落ちた。九兵衛が拾い上げてみたら、死んでおった。

そこで夫婦は早速、お寺へ行って、その娘の金を寺僧に納めようと決心した。二人はその蠅の屍骸を小箱に入れて、それも携えて行った。お寺の主僧自空上人は、その蠅の話を知ると、九兵衛夫妻は正しい取計いをしたと明言された。それから自空上人は、玉の魂のために施餓鬼を営まれ、蠅の遺骸に対して、妙典八巻を誦された。そして蠅の遺骸の入っている箱は、お寺の境内へ埋められて、

適切な銘の書いてある卒塔婆が一基、その上へ建てられた。

〈完〉

原案

しんちよもんじゆう

『新著聞集』卷五第十一 執心篇

ぼうこんはい

「亡魂蠅となる」

洛陽 寺町通 松原下ル町に飾屋九兵衛といふ者の召つかひに
玉といふ女あり。生国は若狭の者なり。四、五ヶ年奉公つとめしに、
しかじか、衣類など、持ぎりければ、主人も心にくくおもひ、ある時、
尋しに、

「されば、幼年のころ、父母ともにはかなく成けるが、我身より外、
跡弔ふべき人もなければ、此辺なる常楽寺に位牌を立て、忌日ごとに
供養をなしたき志願て、何事も心にまかせず、くらし候ひしが、
最早百目ほどの銀を用意せし」

と申ければ、主人も、
「下賤の身として奇特なる志かな」

とて、随喜し、扱、かの寺へ二霊の位牌をたて、祠堂料とて、
銀七十目、おさめぬ。残りし銀をば、主人の妻にあづけ置し。

かくて、玉、過し冬のころより、悩けるが、病も、おもりければ、
宇治の辺に伯母なりし者の方へ引こし、医療を加へしかども、叶で、
元禄十五年正月十一日に身まかりし。

主人のもとへも、此よし、通じければ、不便の事におもひし。
然るに、二月へ入り、いまだ時節もいたらず、殊にいつもよりも余寒
つよきに、尋常見なれしよりも、ひとときは大なる蠅一ツ飛来り、
九兵衛夫婦があたりをのみ、飛まわりければ、うるさく覚へ、
痛まぬやうに捕へて他へ二日程すぎて、帰りければ、かさねては
裏なる高瀬川のあなたへ放しけるに、又、販りぬ。

されば、家内の者ども、
「これは。玉が亡魂ならん」

と口ずさみければ、主人もあやしき事におもひ、

「心だめしにせん」

とて、羽先を少し切て、所を隔て放しやるに、此蠅、又、皈りけり。

あまりの不思議さに、此たびは、かたちを紅に塗て放ちけるに、
印きへずして、又、皈りければ、今は、夫婦の者も興ぎめて、
とやかく思ひはかるに、

「日外あづけし銀の事をおもひ出し、是に執着せしものか」

亦是

「追善など、うけんが為か」

兎に角、不便におもひ、

「いかがせん」

と思慮するに、伯母は後世の道には疎き者の様に常々語りしかば、
「その者の為なれば、右の銀をば、貴き寺へも上げ、回向をこひ、
然るべし」

とて、日比、帰依し奉る事なれば、深草の通西軒自空上人と、

又は、亡者の宗門なれば、同じ山の瑞光寺慈明上人と、此両寺へ
おさめ奉り、

「事の子細を具に申上よ」

とて、二月廿八日、九兵衛が弟へ申ふくめ、

「幸、明日は四十九日にあたりければ」

とて、

「今、まいれ」

とて申渡しける所に、今まで、飛まはりける蠅、何としてかは、
目前にて自滅しければ、みな一同に、おどろき、いよいよ奇異の

おもひをなし、これをも箱に入れて、通西軒へ持参し、始終を語れば、
律師もあはれに思し召、蠅に「加持土砂をふりかけさせたまひ、
施餓鬼など、ねんごろに修し、右の信施は永々の祠堂にぞ入れさせけり。

扱、瑞光寺の上人へは、法義異なれ共、年来の親切なれば、
この蠅をつかはし、

「供養をうけさせ然るべし」

とて、浄人恵雲法師、承り、持参申されければ、妙典八軸、
読誦したまひ、則、山上へ法のごとくに葬せたまひ、率都婆など
立させ、翌日も又、回向の為にとて、此所へ来たまふに、塔婆の際に、
深ふして、細き穴、ありければ、上人も不思議に覚へ、掘せらるに、
昨日、埋させられし蠅、無りけり。

実に両大徳の追善により、速疾、生天せしものと、有がたくこそ
侍りし。

その後。九兵衛、深草へ来り、

「廿八日以来、蠅来らず。かへすがへすも希有の事にてありし」
と語りけるとなり。

Story of a Fly

Lafcadio Hearn

About two hundred years ago, there lived in Kyoto a merchant named Kazariya Kyūbei. His shop was in the street called Teramachidōri, a little south of the Shimabara thoroughfare. He had a maid-servant named Tama,—a native of the province of Wakasa.

Tama was kindly treated by Kyūbei and his wife, and appeared to be sincerely attached to them. But she never cared

to dress nicely, like other girls; and whenever she had a holiday she would go out in her working-dress, notwithstanding that she had been given several pretty robes. After she had been in the service of Kyūbei for about five years, he one day asked her why she never took any pains to look neat.

Tama blushed at the reproach implied by this

question, and answered respectfully:—

"When my parents died, I was a very little girl; and, as they had no other child, it became my duty to have the Buddhist services performed on their behalf. At that time I could not obtain the means to do so; but I resolved to have their *ihai* [mortuary tablets] placed in the temple called Jōrakuji, and to have the rites performed, so soon as I could earn the money required. And in order to fulfil this resolve I have tried to be saving of my money and my clothes;—perhaps I have been too saving, as you have found me negligent of my person. But I have already been able to put by about one hundred *mommé* of silver for the purpose which I have mentioned; and hereafter I will try to appear before you looking neat. So I beg that you will kindly excuse my past negligence and rudeness."

Kyūbei was touched by this simple confession; and he spoke to the girl kindly,—assuring her that she might consider herself at liberty thenceforth to dress as she pleased, and commending her filial piety.

*

Soon after this conversation, the maid Tama was able to have the tablets of her parents placed in the temple Jōrakuji, and to have the appropriate services performed. Of the money which she had saved she thus expended seventy *mommé*; and the remaining thirty *mommé* she asked her mistress to keep for her.

But early in the following winter Tama was suddenly taken ill; and after a brief sickness she died, on the eleventh day of the first month of the fifteenth year of Genroku [1702].

Kyūbei and his wife were much grieved by her death.

*

Now, about ten days later, a very large fly came into the house, and began to fly round and round the head of Kyūbei. This surprised Kyūbei, because no flies of any kind appear, as a rule, during the Period of Greatest Cold, and the larger kinds of flies are seldom seen except in the warm season. The fly annoyed Kyūbei so persistently that he took the trouble to catch it, and put it out of the house,—being careful the while to injure it in no way; for he was a devout Buddhist. It soon came back again, and was again caught and thrown out; but it entered a third time. Kyūbei's wife thought this a strange thing. "I wonder," she said, "if it is Tama." [For the dead—particularly those who pass to the state of Gaki—

sometimes return in the form of insects.] Kyūbei laughed, and made answer, "Perhaps we can find out by marking it." He caught the fly, and slightly nicked the tips of its wings with a pair of scissors,—after which he carried it to a considerable distance from the house and let it go.

Next day it returned. Kyūbei still doubted whether its return had any ghostly significance. He caught it again, painted its wings and body with beni (rouge), carried it away from the house to a much greater distance than before, and set it free. But, two days later, it came back, all red; and Kyūbei ceased to doubt.

"I think it is Tama," he said. "She wants something;—but what does she want?"

The wife responded:—

"I have still thirty *mommé* of her savings. Perhaps she wants us to pay that money to the temple, for a Buddhist service on behalf of her spirit. Tama was always very anxious about her next birth."

As she spoke, the fly fell from the paper window on which it had been resting. Kyūbei picked it up, and found that it was dead.

*

Thereupon the husband and wife resolved to go to the temple at once, and to pay the girl's money to the priests. They put the body of the fly into a little box, and took it along with them.

Jiku Shōnin, the chief priest of the temple, on hearing the story of the fly, decided that Kyūbei and his wife

had acted rightly in the matter. Then Jiku Shōnin performed a *Ségaki* service on behalf of the spirit of Tama; and over the body of the fly were recited the eight rolls of the sutra *Myōten*. And the box containing the body of the fly was buried in the grounds of the temple; and above the place a *sotoba* was set up, appropriately inscribed.

原案

『新著聞集』巻五第十一 執心篇「亡魂蠅となる」

- ・ 底 本 小泉八雲著・平川祐弘編『怪談・奇談』講談社学術文庫、1990年

参考資料

- ・ 「小泉八雲 蠅のはなし（大谷正信譯）附・原拠」Webサイト『Blog 鬼火～日々の迷走』〈2025年3月24日更新〉
https://onibi.cocolog-nifty.com/alain_leroy_/2019/09/post-a488a8.html
- ・ 「富山大学学術情報リポジトリ」内「ヘルン文庫」所収「2174_新著聞集〈巻5〉」
<https://toyama.repo.nii.ac.jp/records/13214>

底本を元に、参照資料を用いながら、現代仮名づかいの読み下し文に書き換えました。
原文からの変更点は以下のとおりです。

1. 適宜、改行、および読点「、」を加えました。
2. 一部、ひらがなを漢字に、漢字をひらがなに変更。
3. 句読点の一部変更、また一部に空白を入れた分かち書きにしました。
4. ふりがなを、ののラジオの解釈のもと、加えました。
5. 「資堂」⇒「祠堂」に変更。

英語原文

Project Gutenberg

https://www.gutenberg.org/cache/epub/55473/pg55473-images.html#Story_of_a_Fly

Title: Kotto: Being Japanese Curios, with Sundry Cobwebs

Author: Lafcadio Hearn

Illustrator: Genjiro Yeto

Release date: September 1, 2017 [eBook #55473]

Most recently updated: October 23, 2024

Language: English

Credits: Produced by Marc D'Hooghe at Free Literature (online soon in an extended version, also linking to free sources for education worldwide ... MOOC's, educational materials,...)

Images generously made available by the Internet Archive.)

Podcast ののラジオ 好評配信中！



視聴・購読はこちらから
<https://gekidannono.com>

ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。

みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでいただけるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。

いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作などのあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください。

劇団ののと読む名作文学 小泉八雲作・大谷正信訳 『蠅のはなし STORY OF A FLY』 Podcast 版

発行日 令和 8 年 2 月 21 日

著 者 小泉八雲作・大谷正信訳

編 集 劇団のの

発 行 劇団のの

[https://gekidannono.com/
radio@gekidannono.com](https://gekidannono.com/radio@gekidannono.com)

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。

ゴシック体のルビは、原文に振られていたものです。

底 本 『小泉八雲全集第八巻 家庭版』第一書房（1937）

初 出 明治 37(1904)年

図書カード URL

<https://www.aozora.gr.jp/cards/000258/card59431.html>

